

## 補論 所謂「北狄の押へ」の再検討

——浪川氏の拙稿批判によせて——

浪川健治氏の「藩政の展開と国家意識の形成」(『日本史研究』二三七号)は、示唆に富み啓発されるところの多い論稿であった。氏は津輕藩におけるアイヌ民族支配の形成過程を明らかにし、寛文蝦夷蜂起事件を契機として、同藩の藩国家意識である「北狄の押へ」論が次第に醸成されてきたと主張する。論旨の展開にあたつて下敷としたのが、菊池勇夫氏の論文(『地方史研究』一六一号)と拙稿「北方辺境藩研究序説」(『弘前大学国史研究』六八・六九合併号、以後、拙稿と略記する)であった。特に浪川論文第三章において、拙稿は俎上に載せられ、批正を受ける点が多々見受けられた。筆者にとつて、学問的に真摯な態度を持した浪川氏の批判を、拙稿が蒙ったことは、誠に嬉しい限りであった。<sup>(1)</sup>

また津輕藩研究が、言い放しや書き放しに終始せず、このようなキチンとした批判と対応を積み重ねることによつて、今後発展しえる可能性を明示してくれたことは、同藩をフィールドとする研究者にとつても非常に有意義であると考ええる。なお浪川論文の拙稿に対する批判の中には、妥当と思われる補正を余儀なくさせられた点と、筆者なりに反批判を試み改めて同氏に再考を促したいと考える箇所があった。以下、当補論において、同論文に対する反批判と、新たに補正すべき事柄を述べてみたい。

拙稿に対する浪川論文の最大の批判点は、津輕藩にあって「北狄の押へ」論が形成されたのは、幕藩体制成立期ではなく、寛文蝦夷蜂起事件を契機として、藩政中期（享保期）に至る時期であるという点である。全体の論旨は別に措くとして、拙稿との関わりに絞って同氏が批判の根拠としたのは、享保一六年に成立した官撰史書「津輕一統志」〔新編青森県叢書〕一 歴史図書社 昭和四九年 以後「二統志」と略記する）以前の正史・準正史には、「北狄の押へ」なる文言はみられないものである。更に最も古い藩史とみなされる「東日流記」（寛文四年成立）に、「北狄の押へ」の文言は存在せず、また同時期に編纂された「愚耳旧聴記」にも同様にみられないとしている。

筆者は拙稿において、幕藩体制にあって津輕藩が「北狄の押へ」として位置づけられ、大坂の陣参陣の事情がその基点となったのではないかと論じた。その際に論拠とした史料が、後代の編纂物である「津輕旧記」であったことを想えば、浪川氏の批判は実に当を得たものであり、首肯せざるをえない。ただし筆者は、拙稿中で「津輕旧記」を引用するにあたり、同史料にみられる内容の真偽は、なお一次史料の提出がなくては確認の仕様がなないと断つてある<sup>(2)</sup>。このような保留した部分を残しての提言を、浪川論文は保留分を斟酌せず<sup>(3)</sup>に言及しており、これでは筆者は困惑するのみである。また「津輕旧記」一点を以て「北狄の押へ」論を展開したのではなく、幕府が津輕藩に賦課した公役の全体を洗い直し吟味した上で、右の論旨を述べたにも拘わらず、この点に関しての批判は見当らなかった。従って、拙稿の全体的な論理構成の中から、新たな言及があれば幸いである。

さて浪川論文が拙稿批判の典拠とした「東日流記」等の編纂物に関して、今一度筆者なりに検討してみたい。浪川論文の註（五二頁）によれば、「東日流記」の所蔵先は市立弘前図書館とあり、所属文庫名の記載はない<sup>(3)</sup>。筆者が同館にて検索したところ、浪川氏は岩見文庫本「東日流記」（GK二四一七）を利用したと考える。もう一本の「東日流

「記」は、大正三年の「弘前市史編纂材料」の写本で、これは筆写状況が、御世辞にも良好とはいえないもので、浪川氏がこれを採用したはずがない。また瑣末なことではあるが、同氏が論拠とした箇所を収載してある書名は、「東日流記」「津軽後記」などではなく、「東日流記後録」が正確な表題であった。この岩見文庫本「東日流記後録」(岩見文庫本と略記する)には、浪川論文が主張する如く、慶長一九年の大坂冬の陣の項に、「北狄の押へ」なる文言はみられず、「津軽・合浦へ要服地故、東国之御心当に被思召之間、早々罷下候様にと重而之上、御目見被仰付、御下り被遊也」と、徳川家康の意志を登載してある。右本に拠る限りにおいては、浪川氏の主張は妥当といえよう。

ところが、『弘前図書館蔵郷土史文献解題』(弘前図書館 昭和四五年)によれば、浪川論文の利用したと思われる岩見文庫本は、「本文に『愚耳旧聴記』の記事が混入しているなどから、この本は善本とは云い難い」(同書 二三頁)とあり、その史料的价值に重大な疑問を投じている。まして前述した弘前市史編纂材料本は、岩見文庫本と同様であるのに加え、謄写の方法にも疑義があるので問題にならない。即ち弘前図書館蔵のいずれの写本も、「東日流記」の良質な底本と断定するのは困難なのである。

さて弘前大学付属図書館には小野文庫と称する、郷土史家小野慎吉氏蒐集のコレクション(郷土史関係史料二四六九冊)が所蔵されている。同文庫架蔵の「東日流記」は、筆写状況も良好であり、「東日流記」上・下と「津軽世家系譜伝」を合冊して一冊本を構成している(同書を弘大本と略記する)。弘大本の大坂冬の陣に関する該当箇所をみても、「津軽旧記」と同様の記載内容であって、「津軽は北狄のおさえ」と記してある。筆写状況は別として、弘大本にも、前述した弘前図書館所蔵の各写本と同様、底本とは断定しがたい要素が見受けられた。従って、筆者は弘大本を以て拙稿の自説補強と、浪川論文への反論に援用する積りは、毛頭ない。ただし拙稿に関する浪川論文の批判点には、

再検討の余地がかなり存在することを、誰しも認めるところであろう。更に浪川論文では、「愚耳旧聴記」に「北狄の押へ」の文言が出てこない点を、氏の自説補強の意味を込めて強調してあるが、同書は津軽為信の一代記で、為信死去の慶長一二年で記録が終了する。所謂「北狄の押へ」なる文言が出てくる、問題の慶長一九年大坂冬の陣の記事は、同書に初めから収録する予定がないのであるから、右の文言が登載されないのは当然であろう。編纂年代の新旧を問わず、「東日流記」や「津軽旧記」等、三次史料を論点の基に据えることは、如何に危険であるかを自戒を込めて銘記するとともに、三次史料（特に津軽藩側の）を以てしては、議論は一步も前進しないのである。

浪川論文の拙稿批判に対する筆者の見解は、以上の通りである。勿論筆者の反批判によって同論文が、その価値を減少したわけではなく、新たな問題がその過程で生じてきたのであって、筆者はその問題を三点に分けて次の道筋で考察してゆきたい。第一に、大坂冬の陣における東北大名の出兵状況の中にあつて、津軽藩の同陣参陣とその前後の動向は、如何なる歴史的意義を有するのか。第二に、「押へ」の文言が幕藩体制前期に、大名間で普遍的に使用された用語であつたかどうか。第三に、浪川論文は津軽藩の松前移出米の検討を通じて、移出が継続された元禄期までの同藩を、「蝦夷地支配の最前線」（五四頁）と認定しており、拙稿の論旨を間接的に包摂している節も見受けられる。とすれば、「北狄の押へ」ではない最前線と称する概念は、どのように考察すべきなのであろうか。

慶長一九年（一六一四）一〇月四日、幕府は東北諸大名に対して大坂参陣（江戸を経由しての）を命じる陣触れを<sup>(4)</sup>令した。現在、伊達氏・秋田氏・佐竹氏・上杉氏・南部氏五氏の陣触れ受領が確認されており、一〇月二四日には、伊達氏をはじめとする奥州勢は先手を命ぜられて上洛したという。<sup>(5)</sup>奥羽の有力大名の中にあつて、出羽山形城主最上家親のみは、松平忠輝・鳥居忠政等譜代大名とともに、江戸城留守居を命ぜられた。<sup>(6)</sup>その理由について『寛政重修諸

家譜』は、家親は「幼年より召仕はれ、御心安くおぼしめされしとて、江戸城の御留守を命ぜられ<sup>(7)</sup>」と記しており、家親は家康に長年近侍したため、家康の信頼が厚かったことによると叙述している。最上家親に対してとった幕府の措置は、奥羽大名にとって極めて例外的なものであり、最上氏を除外した全奥羽大名に参陣の陣触れが下達されたのは、まず間違いないところである。

陣触れの受領後、各大名は江戸に参集し、慶長一九年一〇月二〇日、伊達氏や上杉氏等の大々名は独自に出発を命ぜられ、上方へ発向した<sup>(8)</sup>。同月二三日、幕府は東国・東北大名で大々名を除外した大名を新たに編成して、秀忠軍を構成した。奥羽大名では相馬氏・秋田氏・南部氏などが、秀忠軍の各番手に編成されて、各々上方への進発を決められた<sup>(9)</sup>。津軽氏は当秀忠軍の各番手の中に記載がなく、同軍の軍列構成に当初から組み込まれていなかった可能性が強い。大坂に津軽信枚が到着したのは、同年一月二五日のことで、これは「吉川文書」(同年一月二八日付の吉川広家書状)によっても確認されている<sup>(10)</sup>。秀忠軍の軍列にあるはずの南部利直が、津軽氏よりも一〇日早い一月一日に大坂に到着して秀忠軍に参加しているのをみれば、軍列編成と遅参とは関係の薄いことがわかる。つまり津軽氏は遅参を理由に秀忠軍に編成されなかったのではなく、幕府は津軽氏を秀忠軍の軍列に構成する意図を、当初から有していなかったと考えるのが妥当であろう。

大坂冬の陣に関する最も信頼度の高い戦記としては、家康の側近林羅山が記録した「大坂冬陣記」がある<sup>(12)</sup>。同書には慶長一九年の津軽信枚参陣について、

(慶長一九年)  
十一月二十五日、津軽越中守御目見、是者帰江戸可勤御番之旨被仰付、本多佐渡守奉之、  
(信枚)  
(正信)  
(傍註筆者)

とあり、信枚は「津軽家譜」や「津軽旧記」そして「東日流記」など、津軽側の文献に記す国元津軽帰還ではなく、

江戸城在番を下達されたのであった。また「一統志」慶長一九年七月条には、信枚の津輕進発が七月下旬とあり、前述した東北諸大名に対する大坂参陣の陣触れが、一〇月四日であるのをみれば、当時陣触れなくして大名が勝手に国元を離れることはまず考えられないので、「一統志」の記載に信頼を置くことは到底できない。このように津輕側の史料は、大坂陣関係の日付がほとんど登載されていないか、記述はあっても曖昧で全く信用しかねるものが大多数であり、論拠とするには危険である。

さて幕府が津輕氏に大坂冬の陣で、帰国ではなく江戸城在番を命じた意図が問われてこよう。「大坂冬陣記」の記述は、これ以後津輕氏に関わる部分がなく詳細は不明である。ただし、幕府は陣触れの下達は実施したものの、前述の通り津輕氏の大坂参陣が幕府の構想に組み込まれていなかったため、既定の戦場配置に同氏を配備できず、例外的な措置として江戸城在番を命じたと推察される。

ところで津輕海峡を隔てて隣接する松前氏も、大坂冬の陣に参陣した気配はなく、慶長一九年四月、大坂方と戦争勃発の機運が高揚している最中に、幕府は藩主松前公広を態々帰国させた。<sup>(14)</sup>津輕氏は江戸城在番の後、夏の陣に参陣した記録もなく、恐らく冬の陣終了後に帰国したと考えられる（後世の編纂物は、津輕氏が冬の陣終了後に帰国したことの<sup>(15)</sup>みを採り上げて、錯誤したのであろう）。なお南部氏は茨木城破却終了後、元和元年正月二四日に下命があつて帰国した。

津輕氏と松前氏の右述の動向は、次のように解釈することが許されないであろうか。周知の如く両氏はともに幕藩国家の北辺地域に位置し、所謂蝦夷地・蝦夷島に接する領主である。松前氏は豊臣氏との戦争勃発直前の緊迫した状況にも拘わらず帰国を許され、一方の津輕氏は徳川秀忠軍の軍列編成に予定されていない。右のことからすれば、両氏は大坂冬の陣参陣を初めから幕府に期待されていなかった節がある。それでは幕府が両氏に期待した役務とは、い

ったい如何なるものであらうか。

大石直正氏は、論稿「外が浜・夷島考」において、日本中世国家の範囲が夷島から硫黄島まで、中世国家の東の境界が陸奥国の外が浜であり、夷島は境界の外に位置づけられた特殊な境域であった（北方の国家的流刑地の意味を含めて）、と述べている。<sup>(16)</sup> 筆者はかつて慶長一四年の花山院忠長の蝦夷島配流の歴史的意義を、蝦夷地と東北大名との関わりにおいて論じたことがあった。それによれば、幕府は公家衆の配流先を、当初勅勘の故もあって幕藩国家極北の「多そか島」と、同極南の「硫黄カ島」と定めた経緯があった。<sup>(17)</sup> 即ち幕藩国家にあっては、国家の範囲を蝦夷島から硫黄島までと定め、蝦夷島を国家的流刑地と認識していたのである。これは先述大石説と合致するものであり、幕藩国家は日本中世国家の四至観及び領域観念を伝統的に継承したと解釈されよう。換言すれば、幕藩体制成立期の蝦夷地は、幕藩国家の北の境界外に位置づけられた特殊な地域であることを示唆している。しかもこの認識は、幕藩領主にとって普遍的なものであったと見做しても大過なからう。津軽氏と松前氏が、まさに幕藩国家と蝦夷地・蝦夷島との境域に位置する大名であることを想えば、両氏には幕藩国家境域警衛の役務が期待されたと考えられないであらうか。それは全国的な大名配置に立脚した考え方としての「境界の押へ」であり、「北辺の押へ」という文言によっても表現され得る概念である。

それでは右に述べた「押へ」なる文言もしくは概念が、幕藩体制成立期において存在したか否かが問われてこよう。寛永四年（一六二七）、会津の蒲生忠郷死没にともなう領地替を伝える、細川忠興書状には、次のような文言がある。<sup>(18)</sup>

松野州跡へ浅但州可被遣かと江戸取沙汰由候、存外にて候、会津ハ出羽・奥州之押ニ成所ニ而候（下略）、（傍点筆者）

とあり、細川忠興は会津を「奥羽の押へ」の地と認定している。時代は若干降るが、貞享元年（一六八四）に幕府が諸大名から徴した「貞享書上」の鳥居左京亮の巻に、

一、元和八年戊戌、台徳院様ヨリ左京亮忠政ニ羽州最上郡廿四万石ヲ賜ヒ、東・国・ノ・押・ヘ・ニ・命・セ・ラル、<sup>(19)</sup>（傍点筆者）とあり、出羽山形は「東国ノ押へ」として、幕府から認められていた。右の二例にみる如く、全国的な大名配置の観点からすれば、各地域の地理的特性を加味した「押へ」論は、当時の幕藩領主にとって格別奇異なものではなく、むしろ大名配置の基幹理念として機能していたといえよう。

津軽氏と同じく北奥大名である南部氏が、大坂冬の陣に参陣を求められたのは、領知高の規模が津軽・松前両氏と比較して格段に大きく（慶長一四年の「禁裏御普請帳」<sup>(20)</sup>によれば、南部氏の高は津軽氏の二倍以上である）、出陣と同時に境域警衛にも耐えられると、幕府に認められたことによる。大坂夏の陣に際しては、幕府は南部利直に出陣催促をせず、將軍様御意被成候へ、又上方御出馬被遊候、信濃守事へ、此節在所ニ罷有、御在陣中、東・国・筋・能・相・守・可・申・候、上方出陣無用と被仰出候間、可得其意由被仰越候故、奉任仰出国許ニ罷在候<sup>(21)</sup>（下略）、（傍点筆者）

と、在国して東国筋警衛を厳命した。南部氏への通達にみる如く、東国（具体的には奥羽地方を指す）と境域警衛が幕府の賦課した役務であり、これは津軽・松前両氏にあっても同様であったと考えられよう。

拙稿において縷々述べた、成立期から普遍的な通念として「北狄の押へ」論が通用していたとする論旨には、右の文脈からすれば若干の飛躍があったと思われる。浪川論文の指摘の如く、「北狄の押へ」としての意識が、津軽藩にあって藩国家レベルで醸成されてくるのは、やはり幕藩制中期に至る時期と認められよう。しかし、それ迄の期間に「押へ」の観念が存在しなかったのかといえそうではなく、大坂の陣に対する参陣状況と北辺大名の動向をみた場



合、幕藩国家境界域の警衛を役務とする「境界の押へ」乃至「北辺の押へ」の概念は、成立期幕藩国家に存在したといえる。幕藩国家において「北狄の押へ」論が徐々に形成されてくる背景には、右に述べた日本中世国家以来の歴史的な国家観・領域意識の踏襲と、それに基づく幕藩国家の対処（境域警衛の下命）が厳然として存在したからで、「北狄の押へ」論のみが突然浮上してきたものではなかったのである。

拙稿にて明確にした、幕府による津輕藩に対する公役の賦課形態自体については、再検討の余地はなく、浪川論文も批判の対象としていない。ただし浪川論文が投じた波紋は、北奥地域領主権力の特徴を考察する上で重要な点を衝いており、また決して見過してよいものではない。それ故、筆者なりに率直に受けとめて、批判に対する回答と拙稿の補正を試みた積りである。成立期津輕藩の史料は、極めて限定されているため、当補論も十分に意を尽せぬことが多く、飛躍した展開もあったと思われるが、大方の御批正を賜ることができれば幸いである。

## 註

(1) 拙稿に関しては、多くの諸賢から、温かい励しと御意見を頂戴した。特に海保領夫氏には、『季刊北海道史研究』二二号において、懇切な紹介と批評を賜り感謝に耐えない。一方『史学雑誌』第八九編五号「回顧と展望」(九六頁)においては、何の根拠も示さぬまま拙稿を一刀両断に切り捨てている。「回顧と展望」号は、紙数の制約があるため(筆者も執筆の経験があ

り、各論文に簡潔かつ的確な評をすることが、実に困難な作業であることを承知しているが)、右の仕様になったと推察される。しかし根拠を示さぬ切り捨てには反論の方法がなく、執筆者の溜飲は下がっても、切られた方は困惑と欲求不満が残るだけである。「回顧と展望」号の執筆者には、論評の際に慎重な配慮を望みたい。

(2) 本書九頁を参照されたい。

(3)

浪川論文は、史料の所蔵先を一貫して「弘前市立図書館」と記してある。正確には「弘前市立弘前図書館」である。また行論中、「一統志」の成立過程を論じた際（同論文四九頁）、『新編青森県叢書』一所収「一統志」の解題を多く引用している。浪川氏の根拠とした、解題中に紹介されている享保一二年一〇月二日の触と、同年一一月五日の追加条文の史料は、弘前藩庁日記（国日記 弘前図書館蔵）の当該月日の条には、該当する触と条文は存在しない。筆者が更に検索したところによると、浪川論文と解題のいう一〇月二日の触と称するものは、同月二日ではなく国日記一〇月二四日の条に収録してあった（一〇月二日の日付の記載はないので、同日の触とするには問題がある）。また一一月五日の追加条文と称する文章は、国日記一〇月二四日の条収録の前述触中の一条であって、別箇に出されたものではない。この点においても訂正の必要がある。総じて当「一統志」の解題は出典を全く明記しておらず、また読解文にも問題があるので、これに憑拠することには強い不安が残る。

(4)

『大日本史料』第十二編之十五 慶長一九年一〇月四日の条。

(5)

右同書 同年一〇月一六日の条。

(6)

右同書 同年一〇月二三日の条。

(7)

『寛政重修諸家譜』第二（統群書類従完成会 昭和三十九年）一三三頁。

(8)

前掲(4)の慶長一九年一〇月二〇日の条。なお佐竹氏は、一〇月二四日出発している（同書 一〇月二四日の条）。

(9)

右同書 同年一〇月二三日の条に所収「大坂御陣家々御尋記」。

(10)

右同書 第十二編之十六 慶長一九年一二月二五日の条。

(11)

右同書 同年一二月一五日の条。

(12)

堀勇雄『林羅山』（吉川弘文館 昭和三十九年）二〇六頁によれば、羅山は家康に属従して大坂冬の陣に参陣し、終始家康に近侍していたとある。それ故、「大坂冬陣記」の史料的价值は高いと言わねばならない。また「羅山年譜」（『本朝通鑑』首巻）慶長一九年の条

に、

此冬遂有大坂之役先生奉從於軍旅之間此行也、

とあり、羅山の大坂冬の陣参加は間違いない事実である。

(13) 前掲(10)の慶長一九年一月二五日の条。

(14) 「松前家記」〔松前町史〕史料編 第一卷) 一三頁。

同書五六頁の「松前年々記」に、松前氏夏の陣参陣の記事はあるが、他史料を勘案してもその記載は見当らず、俄には信用しがたい。

(15) 『南部史要』(熊谷印刷出版部 昭和五五年)七一、七二頁。

(16) 『関見先生還暦記念日本古代史研究』(吉川弘文館 昭和五五年)五六八～五九四頁。

(17) 拙稿「東北諸大名と蝦夷地」〔北海道の研究〕四清文堂 昭和五七年)六二～六五頁。

(18) 大日本近世史料『細川家史料』二(東大出版会 昭和四五年)五二八号文書。

(19) 『譜牒余録』中(国立公文書館 昭和四九年)六六三頁。

(20) 『統群書類従』第二五輯 上 武家部 一二八～一

三五頁。

(21) 前掲(19)の二四〇頁。